

芳香漂う

(昭和四十二年第六十回記念祭歌)

稲田雅久君 作歌
名田正信君 作曲

一

芳香漂うやわらかの
露の春の夕間暮
朧にかかる夕月に
浮かぶ辛夷の花吹雪
ああ鳴り止みて聞えこぬ
色壮麗の鐘の音は
六十路の夏に鳴らざるや
いま黄昏の自治の庭

二

細き羽音も秘そやかな
蜉蝣闇をかすめゆき
奔る流れの音もなく
まつよい草の星あかり
ああ死に絶えて泳ぎこぬ
銀鱗おどる紅鮭は
六十路の秋に溯らずや
いま宵闇の自治の川

三

風に棚引く軽やかな
雲蒼空の朝ぼらけ
よぎる秋津の影紅く
残んの月は薄れゆく
ああ舞い去りて渡りこぬ
長の旅寝の雁は
六十路の冬に還らずや
いま有明の自治の原

四

軒に麗なる銀の
垂氷に映る灯に
星影凍みる松が枝を
散るひとひらの雪の花
ああ枯れ果てて萌しこぬ
野も狭に埋もる花の実
六十路の春に咲かざるや
いま夜も更けぬ自治の舎

五

露に滴りぬ生々の
榆林にねむる夢醒めて
牧場におどる朝もやの
さなかに歌う夜明の鳥
見よ紅の山の端に
湧き立つ空の群雲を
つらぬきわたる光かな
いま六十歳の夜は明けぬ

六

寮友の顔に篝火の
炎もわらう記念祭
歌をうたわば玉響の
憂さも舞い飛ぶ火の粉なり
いざ高らかに祭歌
はやる太鼓の轟きは
夜空を深く駆け抜けて
北斗に和する生命なり